

シンポジウム 「イスラム 相互依存世界における平和と対話の促進」

2002年12月13日
東京

ご挨拶

駐日ジブチ共和国大使
駐日イスラム諸国外交団長
ラシャド・ファラ

まず初めに、このシンポジウムへのご臨席と基調講演を賜わります、マレーシア首相マハティール・ビン・モハマッド閣下に対し感謝を申し上げます。このシンポジウムは、駐日イスラム諸国外交団により企画され、日本国会の与党イスラム議員連盟、日本国外務省、国連大学東京本部の多大なご後援によって行なわれるもので、このような試みは先例のないことであります。

マハティール首相閣下のご講演は、「イスラム：相互依存世界における平和と対話の促進」という今回のテーマに対する大きなヒントと指針になるものと確信しております。

セネガル大使ムスタファ・シセ閣下にも感謝申し上げます。大使には信条の違いを超えた建設的な討論会を実現するにあたり、たゆまぬご努力、ご尽力を賜わりました。また、この会には高名な川勝平太、後藤明の両先生にもご出席賜わっており、私どもが目指す平和と相互理解のための対話をさらに深め広げていただけたものと思います。

そもそもこの会は、渦巻く悲観論を静め、新しい積極的な対話を生み出し、そこから人々の友情と信頼の輪を広げていこうではないかということで、与党イスラム議員連盟の先生方と共に計画を開始したものであります。異なる宗教間の話し合いは、紛争の根を絶ち、人々の間に強固な関係を築くうえで大切なことであります。

このシンポジウムで取り上げるテーマはこれまでも広く議論されて参りました。しかし、グローバル化が冷戦時代の二極世界に取って代わった今、このテーマは依然として、時宜を得た切迫した話題として今なお残されています。

この問題を議論するうえで注意しなければならないのは、2つの文明、2つの文化のどちらを選ぶかという問題への矮小化、ひいては西洋と東洋の対立などという単純な図式に陥らないようにすることです。これは危険なことです。

このようなアプローチは、真に平和を愛する何億という人々を、彼らとは何の関わりもない一握りの狂信者や過激派と同一視することになりかねないのです。

このようなアプローチは、科学、芸術、医学、文化といった人類共通の豊かな財産作りに貢献してきた宗教の本質を闇で覆うものです。

このようなアプローチは、最終的には誤解の溝を深め、不信感や猜疑心を植えつけ、

統計では30年以内に世界人口の65%に達するとも言われるイスラム世界を歴史的誤りとして排除しようとするものです。

テロリズムというのは特定の宗教とも人種とも無縁なもので、残念なことに世界中のいたるところに発生しています。私たちにはテロリズムとその根源である貧困、不正、排他主義などに対し、一致協力して闘っていく道義的責任があります。

イスラム教徒が他宗教に対してとるべき態度については、私たちの教典であるコーランに明確に記されています。コーランにおける〈蜘蛛の章〉の記述は、宗教どうしの関係を紛れもなく明らかにしたものです。以下に引用してみます。

「汝らは、彼らが危害を加える者でない限り、（愚かな論争よりも）優れた方法を用いる以外、聖書の民と議論してはならず、彼らにこう伝えるべきである。即ち、我らは神より賜わった啓示を信じ、神があなた方に与えたもうた啓示を信ずる。我らの神とあなた方の神は一つであり、我らが（イスラムで）伏し拝むのはまさにその神である」

つまり、ユダヤ教もキリスト教も、その原典はイスラム教と同じで、いずれも同じ神を崇めているのだ、というのがコーランに示された実態です。事実、旧約聖書や新約聖書の内容にはコーランと多くの共通点があります。

その他の主要な宗教に関しては、相違点を認め合わなければならないことがコーランには明確に述べてあります。お互いに相手の宗教を侵してはならないということです。

つまり、イスラムにおいては、異なる宗教間の対話と共存という考え方は1300年も前に出来上がっていたのです。

お集まりの皆様、

どうか、連帯と友情のうちに共に努力し、未来への希望と期待が憎悪や苦難、戦争などによって打ち砕かれてしまうことがないように、そして新しい世代、私たちの子供たちが平和で健全な世界に生きられるようにしようではありませんか。

こうして各国から様々な視野をお持ちの専門家の方々にお集まりいただいたことによって、今回のシンポジウムが、現実に起きているこの問題について大いに啓蒙の機会になることを確信でき嬉しい限りであります。

マレーシア首相マハティール・ビン・モハムド閣下には、閣下のご協力および対話と平和に向けての指導的なお働きに対して、駐日イスラム諸国外交団よりあらためて感謝申し上げます。

また、日本国外務省および、異文明・異文化間対話の枠組みを構築していただいた国連大学学長ハンス・ファン・ヒンケル博士にもお礼を申し上げます。

最後に、世界中の人々および国々の連帯と相互理解を目指すこのシンポジウムに、このように多くお集まりくださり、この催しを支えてくださった皆様に感謝申し上げます。